

企画展**国立西洋美術館史上初の現代美術展！****ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？
——国立西洋美術館65年目の自問 | 現代美術家たちへの問いかけ**

2024年3月12日（火）～5月12日（日） 国立西洋美術館 企画展示室

この春、国立西洋美術館（東京都台東区上野公園7-7、館長 田中正之）は、21組の現代アーティストたちを招き、当館では初の試みとなる企画展「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？——国立西洋美術館65年目の自問 | 現代美術家たちへの問いかけ」を開催します。



クロード・モネ《睡蓮、柳の反映》
1916年、油彩、カンヴァス
199.3 x 424.4 cm（上部欠失）
松方幸次郎氏御遺族より寄贈
（旧松方コレクション）
国立西洋美術館

■ 国立西洋美術館初の現代アーティストとのコラボレーション

20世紀半ばまでの西洋美術作品を所蔵・公開してきた国立西洋美術館（西美）。現代アーティストとのコラボレーションは、**開館以来65年の歴史で初めての試み**です。館設立の原点を見つめ直し、館の未来を思い描く中で生まれた挑戦的な企画です。

■ 今だからこそ、美術館という場の力を問い直す

2019年、国際博物館会議で「『文化をつなぐミュージアム』理念の徹底」が採択され、2022年には博物館法が約70年ぶりに改正されるなど、美術館の役割は大きく見直されています。さらにコロナ禍を経て、ロシアのウクライナ侵攻といった問題にも直面する今こそ、美術館が自身とそのコレクションを見つめ直し、新しい可能性を見出す必要があります。本展は、**今、美術館だからこそできる方法で、アートの力、美術館の力を問い直します。**

■ 現代日本のアートシーンを代表するアーティスト21組が参画、多数の新作が並ぶ

国内外で活躍する現代アーティストたちが本企画の主旨に賛同。西美所蔵作品にインスピレーションを得た新作や、美術館という場所の意義を問い直す作品などが展示されます。**現代の、そして未来のアートの様相を知るうえでも必見**の内容です。

■ モネ、セザンヌ、ポロック…西美所蔵の名品も一堂に

6000点を超える国立西洋美術館のコレクションからアーティストたちが独自の視点で選んだ作品の数々も見逃せません。**西洋美術史に名を刻むアーティストたちの作品約70点**が、現代とのコラボレーションを通じて、いつもとは違った魅力を放ちます。

参加アーティスト（五十音順）

飯山由貴、梅津庸一、遠藤麻衣、小沢剛、小田原のどか、坂本夏子、杉戸洋、鷹野隆大、竹村京、田中功起、辰野登恵子、エレナ・トゥタッチコワ、内藤礼、中林忠良、長島有里枝、パープルーム（梅津庸一＋安藤裕美＋續橋仁子＋星川あさこ＋わきもとさき）、布施琳太郎、松浦寿夫、ミヤギフトシ、ユアサエボシ、弓指寛治

展覧会概要

20世紀前半までの西洋美術作品を収蔵・展示してきた国立西洋美術館。企画展「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？——国立西洋美術館65年目の自問 | 現代美術家たちへの問いかけ」は、1959年の開館以来初めての試みとなる、現代アーティストとの大々的なコラボレーションによる展覧会です。

当館の母体となった松方コレクションを築いた松方幸次郎は、日本の若い画家たちに本物の西洋美術を見せるため、膨大な数の美術品を収集しました。開館65年、館設立の原点を見つめ直し、館の未来を思い描くなかで生まれた問いかけ——。

「国立西洋美術館の展示室は、未来のアーティストたちが生まれ育つ空間となりえてきたか？」

それは、当館の自問であると同時に、参加アーティストたちへの問いかけです。そして、展示室を訪れてくださるみなさんとともに考えたい問いにほかなりません。

国内外で活躍する現代アーティストたちが当館所蔵作品からインスピレーションを得て制作した作品や、美術館という場所の意義を問い直す作品などを通して、アーティストたちが国立西洋美術館やそのコレクションにどう眼差しを向け、どのような問題を提起しているかをご覧ください。また、モネ、セザンヌ、ポロックら西洋美術史に名を刻むアーティストたちの作品約70点も展示。過去に生みだされた作品と、現代に制作された作品の対話を通じて、当館の新たな可能性を探ります。現代の、また未来のアートシーンを知るうえでも必見の展覧会です。



1959年創建当時の国立西洋美術館
撮影：東京フォトアート



2022年リニューアル開館後の国立西洋美術館

開催概要

展覧会名：「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」
 ——国立西洋美術館65年目の自問 | 現代美術家たちへの問いかけ
Does the Future Sleep Here?
 ——Revisiting the museum's response to contemporary art after 65 years

主催 国立西洋美術館
 協賛 NTT ArtTechnology、DNP大日本印刷
 協力 西洋美術振興財団
 会期 2024年3月12日[火]～5月12日[日]
 会場 国立西洋美術館 企画展示室（東京都台東区上野公園7-7）
 開館時間 9：30～17：30 金曜・土曜日 9：30～20：00

休館日 月曜日、5月7日[火]
 （ただし、3月25日[月]、4月29日[月・祝]、4月30日[火]、5月6日[月・休]は開館）
 ※開館時間・休館日の最新情報は国立西洋美術館公式サイトトップページ「お知らせ」をご確認ください。

観覧料 一般2,000円、大学生1,300円、高校生1,000円
 ※中学生以下は無料。
 ※心身に障害のある方及び付添者1名は無料。
 ※大学生、高校生及び無料観覧対象の方は、入館の際に学生証または年齢の確認できるもの、障害者手帳をご提示ください。
 ※国立美術館キャンパスメンバーズ加盟校の学生・教職員は、本展を学生1,100円、教職員1,800円でご覧いただけます。（学生証または教職員証をご提示のうえ会期中、ご来場当日に国立西洋美術館の券売窓口にてお求めください）
 ※観覧当日に限り本展観覧券で常設展もご覧いただけます。

ウェブサイト <https://www.nmwa.go.jp/jp/exhibitions/2023revisiting.html>



【特別チケット】 ※詳細はウェブサイトをご覧ください。

①**早割さくらチケット**（枚数限定、3月平日利用限定）・・・価格1,200円
 販売期間：2024年1月23日[火]～3月11日[月] ※売り切れ次第終了

②**ペアチケット**（枚数限定、チケット2枚セット、1人で2回ご鑑賞いただくこともできます。）・・・価格3,600円
 販売期間：2024年2月10日[土]～3月11日[月] ※売り切れ次第終了

③**サポートナイトチケット**（20枚限定・参加アーティストと担当研究員によるギャラリートツアー・公式図録付き）
 ・・・価格30,000円 販売期間：2024年2月10日[土]～ ※売り切れ次第終了

同時開催：小企画展「真理はよみがえるだろうか：ゴヤ〈戦争の惨禍〉全場面」
 会期：2024年2月27日[火]～5月26日[日] 会場：新館 版画素描展示室
 一般のお問い合わせ：050-5541-8600（ハローダイヤル）
 国立西洋美術館公式サイト <https://www.nmwa.go.jp/>

国立西洋美術館 SNS 公式アカウント：
 X @NMWATokyo / Facebook @NationalMuseumofWesternArt / Instagram @NMWATokyo / YouTube @NMWATokyo

本展の構成

0. アーティストのために建った美術館？

本展冒頭では、国立西洋美術館は「未来のアーティストたち」の制作活動に資するべく建ったのではなかったかということ、松方幸次郎や安井曾太郎の言葉を想起しつつ問いかけます。当館はじつのところ、財界や美術家をはじめとする民間の多大な助力なしには誕生しませんでした。そのことを、残された資料とともに簡潔にふり返ります。またそれらと併せて、この展覧会のために制作される杉戸洋のタイル作品《easel》を展示します。これはル・コルビュジエによって基本設計された当館本館の「モデュロール」にもともと強い関心を抱いていた杉戸が、その寸法体系にあわせて構成するものとなります。



「松方コレクション：国立美術館建設協賛展」ポスター、1955年、東京国立近代美術館

1. ここはいかなる記憶の磁場となってきたか？

美術館はさまざまな時代や地域に生きた／生きるアーティストらの記憶群が同居し、それぞれの力学を交錯させあう磁場のようなものともいえるはずです。では、国立西洋美術館のコレクションは、いかなる磁場を形成しているのでしょうか。本章ではそのことを、銅版画表現の歴史的血脈とでもいうべきものを意識しながら制作をおこなってきた中林忠良、今回の展覧会にあたって国立西洋美術館の所蔵作品ポール・セザンヌの《葉を落としたジャ・ド・ブッフアンの木々》に触発された内藤礼、さらに当館で過去に開催された「セザンヌ展」（1974年）や「モーリス・ドニ」展（1981年）から大きな刺激を得たという松浦寿夫の作品群をつうじて検証します。



中林忠良《転位'04-地-I》2004年、エッチング、アクアチント、ドライポイント、作家蔵

2. 日本に「西洋美術館」があることをどう考えるか？

国立西洋美術館は、世界各地の美術館や美術史において脱-西洋中心主義化が進められて久しい時代にも、原則として「西洋美術」のみを蒐集／保存／展示せざるをえない機関です。そこではたとえば、藤田嗣治の絵画や素描が日本人画家の作品としてではなく、あくまでも「西洋美術」の一例、もしくは「エコール・ド・パリ」の産物として蒐集／展示されます。この蒐集／展示の力学を自明視せず、いったん揺さぶってみるべく、本章では当館が所蔵する藤田の作品と小沢剛が2015年に制作した《帰ってきたペインターF》（森美術館所蔵）を併置します。それは藤田が戦後に「パリ」に戻るのではなく東南アジアの「バリ」へたどり着くという、歴史に“if”を持ち込んだ作品です。くわえて、小田原のどこによる新作インスタレーションにおいては、地震が絶えない日本に建つ美術館に固有の課題がロダンの彫刻を横倒しにして展示することなどによって示され、さらにその「転倒」の様態に「水平社宣言」の起草者として知られる西光万吉の「転向」が重ねられることで、複雑な問題提起がなされます。



小沢剛《帰ってきたペインターF—Painter F Song》2015年、ビデオ、12分8秒、森美術館

3. この美術館の可視／不可視のフレームはなにか？

国立西洋美術館は「西洋美術」だけを専門にするという「枠組み」のほかにも、もろもろの「フレーム」をもっているはずです。布施琳太郎は、今回の展覧会への参加にあたり、ル・コルビュジエが基本設計した本館建築にはからずとも多大な関心を寄せました。結果として布施は、国立西洋美術館の構造を読み解きながら、むしろいまだ存在しない美術館建築のありかたを、双六のサイコロをモチーフとしながら呈示しようとしています。そ

ここでは、この美術館の建築というフレームが問われます。他方、田中功起は、国立西洋美術館の「不可視のフレーム」といえるものを問題化します。田中は、この美術館にたいする複数の「提案」——実現されないものを含めて——を作品とするのです。具体的には、常設展の絵画を車椅子や子どもの目線に下げて展示すること、乳幼児向けの託児室を臨時で設けること、くわえて展示室内の翻訳言語の選択を拡張することなどです。こうした「提案」によって田中は、美術館が暗黙のうちに前提としている「鑑賞者」の取捨選択を批判的に浮き彫りにします。

4. ここは多種の生／性の場となりうるか？

国立西洋美術館の既存のコレクションはいまだ、白人男性アーティストによる作品がほとんどを占めています。ミヤギフトシは、セクシュアル・マイノリティへの繊細なまなざしをはらんだ立場から、ディアナの怒りを買ったために鹿に変えられ犬に喰い殺されたアクタイオンの神話に示唆を得て、当館を舞台とした映像作品を制作します。また、美術館の展示室は鑑賞者の身体を生活空間から切り離します。これにたいして鷹野隆大は、国立西洋美術館の所蔵作品がもし現代の平均的な居室に並んでいたらどう見えるだろうかと考え、展示室の内部にIKEAの家具を並べ、当館の所蔵作品と自身の写真作品とを併置します。いっぽうで長島有里枝は、2023年に名古屋でおこなった「ケアの学校」の展示を改変しつつ当館へと持ち込み、いわば「見ること」の制度である美術館のなかで「看ること」の可能性を拓きます。さらに飯山由貴は、松方コレクションの成りたちを読み解き、そこに第一次世界大戦の戦争記録画やナショナリスティックな意図をもって発注された絵画が含まれていたことに着目しつつ、松方幸次郎が想定した「アーティスト」とはどういうものかを批判的に問おうとしています。



鷹野隆大《Kikuo (1999.09.17.Lbw.#16)》
「ヨコたわるラフ」シリーズより
1999年、ゼラチン・シルバー・プリント、Courtesy of Yumiko Chiba Associates
©Takano Ryudai

反-幕間劇——上野公園、この矛盾に充ちた場所：上野から山谷へ／山谷から上野へ

数々のミュージアムが建ち並ぶ上野公園。国立西洋美術館も、そんな「文化エリア」にあります。いっぽう、こんにちでは数が減ってきたように思えるにせよ、美術館から一步外に出れば、そこは路上生活者の方々が棲まう場でもあります。上野公園がより整備され、ある意味では浄化されていった反面、路上生活者の姿は見えにくいものとなっていった感があります。この美術館はかつて一度でも、そのような公園内の現実を直視してきたでしょうか。本展に「幕間劇」のように、けれども小喜劇のごとく演じられるものに「反して」さし挟まれるこのセクションに並ぶのは、上野と同じように路上生活者の多い山谷地区におよそ一年通い、そこで暮らすひとびと、あるいは彼ら－彼女らを支えている方々とこのうえなく丹念にコミュニケーションをとってきた弓指寛治によって描かれた膨大な絵画たちです。それらは、国立西洋美術館がこれまで見つめてこなかった上野公園がはらむ問題もきわめて多角的に照らしだすでしょう。



弓指寛治《ウエノさんのブルーシート小屋》2023年、アクリル、鉛筆／木製パネル、新聞紙、作家蔵

5. ここは作品たちが生きる場か？

美術館というものは（半）永続的に作品を未来へと残してゆくことを望む機関です。それは作品たちの老いを

くいとめ、なるべく安定した環境でそれらを変化のない不死の状態にしようとする制度だともいえるかもしれません。このことは、美術館がときに「墓地」に喩えられてきたことと表裏の関係をなすようにも思えます。しかしながら、いくら不変を望もうと物質としての作品は緩慢ながらも変化してゆきます。竹村京は、2016年にルーヴル美術館で大きく破損した状態で発見されたのち、当館の所蔵となった旧松方コレクションのクロード・モネ《睡蓮、柳の反映》が、最低限の保存処置のみ施されて展示されていることに着目し、その絵画の欠損部分を絹糸で想像的に補完する作品をつくりまします。他方、エレナ・トゥタッチコワは、国立西洋美術館の展示室を迷い歩いた経験と、そこに掛かっている絵画のなかを視線で旅する行為とを重ねあわせた映像作品などを制作します。



竹村京《修復されたC.M.の1916年の睡蓮》(部分、制作過程)2023-24年、糸、絹オーガンジー、カラープリント、作家蔵

6. あなたたちはなぜ、過去の記憶を生き直そうとするのか？

芸術作品の記憶はくりかえし読み換えられ、時空を超えて変容していきます。なかには、歴史的記憶へとみずからの身を投じ、こんにちの世界において過去を別様に「生き直す」ことを試みるアーティストたちもいます。梅津庸一はかつて、自身の身体像をラファエル・コランの《フロレアル（花月）》のなかに投入した一連の自画像を描きました。それは制度批判の意識を抱えながら、過去の絵画に別なる事後の生をもたらすような試みでした。そんな梅津が主宰するアーティスト・コレクティブであるパープルームは、そうした彼の態度を集団化したものとしてはじまったとみなすことができます。メンバーの一員、安藤裕美は、ピエール・ボナールらの造形言語を身体化しつつ、それらを異化する絵画を制作しています。また、遠藤麻衣は今回、当館が所蔵するエドヴァルド・ムンクのリトグラフ連作『アルファとオメガ』の世界観にインスピレーションを得て、それをストリップ劇場の記憶とも絡めながら翻案するパフォーマンス映像を発表します。さらに、じっさいには1983年生まれでありながら「大正生まれの架空の三流画家」を演じてきたユアサエボシは、当館の収蔵作家でもあるサム・フランシスの活動を1950/60年代に知っていたというあらたな「設定」のもと、彼の《ホワイット・ペインティング》と自身の抽象画とを併置します。



梅津庸一《フロレアル-汚い光に混じった大きな花粉》2012-14年、油彩/パネル、角材、照明カバー、樹脂、吸水マット、照明機材用スタンド、ハンドクリーム容器、愛知県美術館

7. 未知なる布置をもとめて

「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」という問いには、“Yes”とは答えづらいものがあります。今回の展覧会の準備過程で、国立西洋美術館という場やそのコレクションから着想を得たアーティストは少なくありませんが、当館がこんにちの日本に棲まう気鋭の美術家たちをおのずと刺戟することは、どうやらほとんどないのです。それゆえ、この最後の章では、国立西洋美術館のコレクションがいまを生きるアーティストをどのように触発してきたか／しうるかと問うのはやめ、むしろ彼らー彼女らの描きだしてきた絵画が、いかに当館の所蔵作品と拮抗するのを見てゆきます。杉戸洋、梅津庸一、坂本夏子という3人のペインターに、2014年に亡くなった辰野登恵子をくわえ、日本の「現代絵画」と呼ばれるものの実験性の程度をはかりつつ、彼らー彼女らの作品を当館のコレクションであるクロード・モネ、ポール・シニャック、ジャクソン・ポロックらの絵画と同じ空間に並べます。そこで提示されるのは、日本のペインターたちは、はたして既知の絵画空間を超える未知なる布置を生んできたのかという問いです。



辰野登恵子《WORK 89 - P-13》1989年、油彩/カンヴァス、千葉市美術館

本展関連プログラム

いずれも当館講堂にて対面形式で実施の予定。ウェブサイトにて開催の詳細・申込方法をご案内いたします。

【記念講演会】 ※事前申込制

1. 「作品と作品をつなぐもの——解釈、応答、変奏」

講師：田中正之（国立西洋美術館長）

日時：4月20日[土] 17:00～18:30（開場16:30）

2. 「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」

講師：新藤淳（国立西洋美術館主任研究員／本展企画者）

日時：5月11日[土] 17:00～18:30（開場16:30）

【スライドトーク】 ※申込不要、当日受付（先着順）

講師：新藤淳

日時：①3月15日[金] 18:00～18:40 ②4月26日（金） 18:00～18:40

【公開座談会】 ※事前申込制

登壇：梅津庸一、小田原のどか、布施琳太郎、松浦寿夫（50音順）

司会：新藤淳

日時：3月23日[土] 17:00～19:00（開場16:30）

【先生のための観覧日】 ※事前申込制

日時：3月15日[金]・16日[土] 15:00～20:00（受付は19:30まで）

展覧会カタログ

図録タイトル

『ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？——国立西洋美術館65年目の自問 | 現代美術家たちへの問いかけ』

◇章・作品解説、参加アーティストによる論考、アーティストインタビュー…などみどころ満載！

◇2024年3月12日[火]より当館ショップ、および一部の書店にて販売予定。

※展覧会概要やプログラム名は変更になる場合があります。最新情報は国立西洋美術館公式サイトをご確認ください。

本展に関するお問合せ

「ここは未来のアーティストたちが眠る部屋となりえてきたか？」

広報事務局（株式会社ユース・プランニング センター内）担当：大山、片山、池袋

TEL：03-6821-8229 Fax：03-6821-8869 E-mail：65years@ypcpr.com

〒150-8551 東京都渋谷区桜丘町9-8 KN渋谷3ビル4F

受付時間：平日10：00～18：00 ※土日祝日・年末年始等の対応はしていません。